全集本『おらが春』について

黄色瑞華

一

文芸研究、特に古典と称されるものの本文研究の役割は大きい。より正確な原典をもとめ、それを正しく読み解いていくことから文芸の研究は始まる。

一茶・一茶文芸の研究は、昭和に入って著しい進展をとげた。昭和三年、一茶叢書を完結し、前年には俳書大系本『一茶一代集』の公刊があった。戦後に至って、日本古典全集本、日本古典文学大系本も出た。これら、本文研究の成果とあいまって、注釈・評論の類の刊行もおびただしい数にのぼっていることは周知のごとくである。

現在刊行中の「一茶全集」（信濃毎日新聞社・昭51＝第一回配本）は、故尾沢喜雄、小林計一郎、宮脇昌三、矢羽勝幸氏など県下の逸材を集め「一茶の全資料をもれなく集録」する、という大がかりな企画であり、その成果は斯界の注目するところである。本稿の対象となる『おらが春』は、丸山一彦氏の校注で第六巻（一三五ページ～一七六ページ）に収めてあり、「本文は自筆稿本により序・跋や巻末付録を嘉永版によって補った。」と注されている。

二

新たに著作が刊行されるには、それだけの意義がなければならない。あいつぐ全集・叢書の類の刊行は研究の成果が著しい進展をとげていることの証でなければならない。いま、『おらが春』第一話一丁表六行めの本文校訂を主要な現行本から抜いてみる。

a 小法師ハ元日の旦、いまだ隅ミ〳〵ハ小闇キに、初烏の声とおなじくがバと起て

b 小法師は元日の旦、いまだ隅み〳〵は小闇キに、初烏の声とおなじくがばと起て

c 小法師は元日の旦、いまだ隅々は小闇きに初烏の声とおなじくがばと起て

d 小法師は元日の旦(あした)、いまだ隅ミ〳〵は小闇(くら)きに、初烏の声とおなじく、がばと起(おき)て

e 小法師ハ元日の旦(あした)、いまだ隅ミ〳〵ハ小闇(をぐら)キに、初烏の声とおなじくがばと起(おき)て(濁二ママ)

f 小法師は元日の旦(あした)、いまだ隅ミ〳〵は小闇(をぐら)キに、初烏の声とおなじくがばと起(濁二ママ)て

g小法師ハ元日の旦、いまだ隅ミ〳〵ハ小闇キに、初鳥の声とおなじくがバと起て

aは叢書本、bは俳書大系本、cは古典全書本、dは古典文学大系本、eは古典俳文学大系本、fは信毎・全集本、gは拙著『校本おらが春』である。このうち、e・fは丸山一彦氏の校訂、ただし、eの底本は初板本（嘉永版・綿屋文庫蔵）、fは一茶自筆稿本である。他の五本は一茶自筆稿本（あるいは、そのコロタイプ版）を底本としている。cはその凡例で、「原文の乱雑な仮名遣は、すべて正しい歴史的仮名遣に一定した」「一茶は平仮名の間に片仮名を混用する習慣があるが（殊に、助辞の「に」「は」「つつ」等）、これはすべて平仮名に統一した」、とことわってある。

さて、右の七本中、cは別にして、他の五本の本文はその表記においていずれも異なり、一茶の用字、すなわち『おらが春』原本の用字法は右の活字本をみるかぎり全く見当もつかないことになる。最新の二本（e・f）は前述のごとくその校訂者は同一人（底本に、自筆本と板本の違いはあるが、自筆本を敷写しにした板本は、この部分に全く誤りはない）、凡例には両本とも「底本に送り仮名を欠く場合は、必要に応じて読みがなでこれを補った。」「かなづかいは底本のままとしたが、必要に応じて歴史的かなづかいを右傍らに（　）をつけて示した。」「底本の片かなはそのままとした。」とある。それなら、「小法師ハ」「隅ミ〳〵ハ」の「ハ」は片仮名でなければならないし、「がバと起て」の「がバ」は、平仮名と片仮名の混用を明確にすべきである。しかるに、全集本（f）・古典俳文学大系本（e）は「がば」（濁ニママ）と校訂してあるから、二字とも平仮名に濁点がある、ということになってしまう。底本の用字法（誤用を含め）を明確にすることの意義は、単に『おらが春』の用字法を明確にするというだけではなく、同時期における一茶真蹟の認否にも大きなかかわりをもつことになるのである。以下、第一話にかぎって、全集本（f）（注1）と『校本おらが春』（g）（注2）における片仮名の異同をあててみる。

全集本

としの始は
（濁ニママ）
さゞめけば
小法師ハ
いまだ隅ミ〳〵は小闇キに
（濁ニママ）
がばと起て
表門ンを丁〳〵と敲けば
上人裸足にて
其世界は
とよみ終りて
みづから工み拵へたる悲しみに
みづからなげきつゝ
俗人に対して無常を演ル
仏門においては
おのれらは
屑屋は
二ツになるぞけさからは
猫にも
苗代は庵のかざりに青みけり

校本おらが春　（底本の濁点は注に示してある）

としの始ハ
ざゞめけバ
小法師ハ
いまだ隅ミ〳〵ハ小闇キに
がバと起て
表門ンを丁〳〵と敲けバ
上人裸足ニて
其世界ハ
とよミ終りて
ミづから工ミ拵へたる悲しミに
ミづからなげきツゝ
俗人ニ対して無常を演ル
仏門においてハ
おのれらハ
屑屋ハ
二ツになるぞけさからハ
猫ニも
苗代ハ菴のかざりニ青ミけり

他人は　　他人ハ
み仏や　　ミ仏や
かゝりつゝ　　かゝりツゝ

片仮名、ことに格助詞の「は」、接尾語の「み」などは作者自身が明確な意識をもって使ったかどうかについて疑問があり、そのゆえに平仮名に置きかえて校訂しても、批判の対象にはならない、という考えもあるだろう。それなら、それと凡例で断わるべきであり、「片仮名は底本のままとした」という断りは意味をなさないばかりか、誤解を招くことになってしまう。

三

第二話の前段末尾（底本四ウ～五オ）

ちゝ母ハ今やおそしとかけ寄りて、一目見るより、「よゝ〳〵」と人目も耻ず大声に泣ころびぬ。日ごろ人に無常をすゝむる境界も、其身に成てハさすが恩愛のきづなに心のむすび目ほどけぬハことはり也けり。

右の部分で、「心のむすび目ほどけぬハ」は、俳書大系本は、

心のむすび目ほどけぬは。(注3)

とするが、他の諸本はいずれも「心のむすび目ほどけぬハ（は）」とする。全集本の注には「心が鬱結してとけやらぬこと」とある。古典全書本の注も「煩悩の鬱結してとけやらぬのも道理である」、古典文学大系本の注は、「気分が晴れず、うつうつとしている状態」とある。

この部分、高丸の遺体を待ちかねていた父母、すなわち明専寺住職夫妻は、到着した駕籠にかけ寄ってその遺体をひと目見るやいなや、人目も恥ず大声をあげて泣きわめいた。一茶は、この事実に対して、平素は人に向って無常の理を説く身の上でも、本人が悲しみの主体となっては、さすがに恩愛のきづなのために、それまでの緊張が一度に解けて人前でとりみだしてしまうというのももっともなことである、というのである。

「心のむすび目ほどけぬハ」の「ぬ」は諸説ことごとく打消の助動詞連体形としているのだが、遺体の到着までは夫妻ともに緊張していたのであり、また、緊張が保たれていたから人前でとりみだすようなことはなかったのである。それが、遺体をひと目見るなり緊張は一度に解けてしまって、どっと泣き伏してしまったのである。作者がここで述べようとするところは、理性を上まわる恩愛の情、その偉大さを讃えることなのだ。したがって、「ぬ」を打消とすれば心の結び目（緊張）は解けないことになり、それなら人前で泣きわめくことにはならない。されば、「ぬ」は完了の助動詞でなければならない。そうすると、この部分は文法上連体形をとるのが正しく、「ほどけぬ」の「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の連体形、すなわち「ぬる」となる。ただし、「る」は脱、したがって本文は、

心のむすび目ほどけぬ〔る〕ハ

と校訂さるべきものと考えられる。いかがであろうか。

四

第三話、39「長の日をかはく間もなし誕生仏」（八丁オ）の前書は、叢書本、一代集本、古典俳文学大系本、全集本ともに「四月八日」、古典全書本、古典文学大系本は「卯月八日」とある。

一茶自筆本（板本も）四丁裏の「蕗の薹三ツ四ツこぼれて」の「四」、二十七丁裏の「去四月十六日」の「四」、三十丁裏の193「九輪草四五りん草で仕廻けり」の「四」、三十五丁裏の258「重箱の銭四五文や夕時雨」の「四」はいずれも「四月八日」の「四」と同一筆順である。「卯」は、「四月八日」とある八丁の裏に52「卯の花の一人きりの社かな」があり「四月八日」の「四」とは明らかに異る。これは、九丁裏の68「寝所見る程ハ卯花明りかな」、93「卯の花もほろり〳〵や蟇の塚」、十九丁裏の「卯月八日髪さげ虫の歌を」の「卯」はいずれも同一筆法である。すなわち、ウノヘンを片仮名の「タ」のごとくに書き、八丁表の「四」とは全く違うのである。『おらが春』における一茶の「四」は、「＝と書き、＝は」を突き抜けている。そのために一見「卯」のように思われるのである。

五

第四話、85「なむあミだ仏の方より鳴蚊哉」（十二丁ウ）の全集本の注は、「念仏を唱えていると、仏壇の方から蚊が鳴いて来るさま。」とある。『評釈一茶のおらが春』[注4]（勝峯晋風）に、

仮に一茶の草庵、俳諧寺の間取りにすれば、坊守の菊女は、乳をせびる二つの子のさと女をやっと寝せつけて、

坐つて針を持つか厨仕事、念仏は一茶があなた（弥陀）に向つて唱へてゐるのだ。蚊が鳴く。すやすや睡るさと女の柔かな頬、菊女の肉つきのいゝ肌を慕はないで、歯の抜けて白髪の、一茶の疲せ枯れて坐るあたりで鳴く。螫しても、むだな老人の血を吸ふつもりはなからう。察するに此の蚊も後世を願って、一茶の唱名にあやかりたいのかも知れない。坊守の方へ行つたら、一ト叩き、往生疑ひなしである。

『おらが春新解』（川島つゆ）[注5]に、

朝夕の礼拝を怠らぬ敬虔な門徒一茶に向つて、仏壇の方からブーンと蚊が鳴き出して来た。コン畜生奴！というのと殆ど同義の「なむあみだ」でもある。一茶は後章において「其座を退けばはや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつつ」と書いているが、礼拝のその座も去らず殺生を余儀なくされる現世の矛盾に、ほろ苦い皮肉をあびせ、それが又、何とはなきユーモアをただよわしめている。

とあって、古典全書本[注6]の注は、

仏壇に向つて念仏を唱へて居ると、仏壇の奥の方から蚊が鳴いて来る。

全集本の注[注7]も、

念仏を唱えていると、仏壇の方から蚊が鳴いて来るさま。

とある。全集本の注が記るされるまでの経過を垣間見ることができるのである。

諸説、「仏の方より」を仏壇の方向からと解し、想像たくましく筆をすすめている。しかしながら、全くの見当違いといわざるをえないのである。「仏の方より」は、蓮如上人の『御文章』中の一句、

一心ニ弥陀ニ帰命スレバ、不可思議ノ願力トシテ、仏ノ方ヨリ往生ハ治定セシメタマフ

を、ふまえたのであって、これに気付かなければいかなる筆も徒労に終ってしまうのである。親鸞教徒としての一茶と『御文章』についてはたびたび述べているから今ははぶくが、『おらが春』では、第二十一話の本文、「たゞ自力他力何のかのいふ芥もくたを、ちくらが沖へさらりと流して」以下や、末尾の「是則、当流の安心とは申也。穴かしこ。」の背後には『御文章』の文句「モロ〳〵ノ雑行ヲステヽ、一念ニ弥陀如来今度ノ後生タスケタマヘト、フカクタノミ申サン人ハ、十人モ百人モ、ミナトモニ弥陀ノ報土ニ往生スベキ事サラ〳〵、ウタガヒアルベカラザルモノナリ。」「コレ当流ノ安心決定シタル、信心ノ行者トハマウスベキナリ。アナカシコ〳〵。」がある。

六

97「電（イナヅマ）〈に〉天窓なでけり引がへる」（十五丁ウ）は、一茶叢書本「電（イナヅマ）一雫天窓なでけり引がへる」、俳書大系本「電（イナヅマ）一雫天窓なでけり引がへる」（注「電」の活字ポイントを落してある）、古典全書本「一雫天窓（しづくあたま）なでけり引がへる」（注、頭注に「原本上欄に『電（イナヅマ）』と頭書して、「一雫」と両案のあった事を示す」とある）、古典文学大系本「一雫天窓（ひとしづくあたま）なでけり引がへる」（注、頭注に「稿本『一雫』に丸を付け、上に『電』（イナヅマ）と書いてあるのは上五を決しかねたのであろう」とあ

る)、古典俳文学大系本「電(イナヅマ)　一雫天窓(ひとしづくあたま)なでけり引がへる」とある。

全集本は、(注8)

電(イナヅマ)　一雫天窓(ひとしづくあたま)なでけり引がへる

と、古典俳文学大系本と同じである。

西原文虎書写の文虎本『おらが春』(注9)には、

電に天窓なてけり引かへる

とある。一茶自筆本は諸注にいうように、

電(イナヅマ)　一雫天窓なてけり引かへる

と、「一」「雫」の右傍にそれぞれ○印が付してあるのだが、自筆本にはこのような例は少なくない。いま、二、三の例をあげれば、五丁表の二行めに、

笑ひのゝしりて

とあり、その右傍に「はやし」と書き込んである。五丁裏三行めには、

仏性得たるのになん

とあって、右傍に「も」と書き込んである。六丁表の一行めは、

丑刻より始りて八日目〳〵に

とあって、その右傍に「打つゝき」、同じ面の三行めには、

いつ〳〵の夜しかとき〻しと

とあって、右傍に「そんせうそこにて」と書込んである。

一茶自筆本には、右のごとくに清書後の訂正加筆が見えるのだが、「電に」の句以外は、いずれの校訂者もそれを認めている。これを推敲の跡と認めたのは西原文虎、その写本が唯一である。現代の研究者がそれに気付かなかったのは、他の推敲箇所のごとくそれが行間に書込まれず、句の上方に書込まれているからだ。また、「電」に○印のないのも右の例と異るところではあるが、これは四丁裏の二行めにその例はあり、同面五行めのように

見るつけても

と脱字に気付いていながら、書込みのないところもあるのだから問題にはならない。

「天窓」はことごとく「あたま」と読んでルビを付してある。しかしながら、この句は『八番日記』文政二年七月の条にある、

稲妻につむりなてけり引蟇

と同一であって、その表記を異にするだけなのである。

『八番日記』文政二年七月の条には、

稲妻や門に寝並ふ目出度顔

稲妻にへな〳〵橋を渡りけり

稲妻や一切つゝに世かなおり

があり、定稿は「稲妻につむりなてけり引蟇」であろう。『おらが春』所収句のうち『八番日記』に同形、同趣をみることができるものは、『八番日記』以前の句をまず『八番日記』に採り、『おらが春』に収めたもの、あるいは『八番日記』以前の句を『おらが春』に収め、同時に『八番日記』にも書入れたものや『八番日記』の句を『おらが春』に採ったか、『おらが春』執筆中に得た句を『八番日記』にも収めておいたというものである。

『電に』の句は、『八番日記』の文政二年七月の条にある「稲妻や門に寝並ふ目出度顔」「稲妻にへな〳〵橋を渡りけり」「稲妻や一切つゝに世かなおり」を推敲、「一雫天窓なてけり引かへる」として、いったん『おらが春』に採ったものをさらに「電に天窓なてけり」に改めたものであろうと考えられる。それで私は、

電（イナツマ）（濁点ママ）〔に〕つひり天窓なでけり引がへる

と校訂すべきものと考えているのである。

七

第十四話（二十七丁オ）、

さん俵（だら）法師（嶋子）といふを作りて、笹湯浴セる真似かたして神は送り出したれど

全集本の注（注10）は、

米俵の丸い藁蓋。疱瘡神を追い払う呪いとして、笹湯（酒を加えた湯）を笹の葉で桟俵にふりかけた後、この桟俵に赤い御幣を立て、供物をのせて川に流し、疱瘡の神を送り出す。

とある。勝峯『評釈一茶のおらが春』は、「一茶と同時代の鎌田桐山は、信州松代では葭葦（よし）で疱瘡棚を造り、赤い紙で幣をこしらへて、これを神体に祀り、赤い注連を張って置く民間信仰を朝陽館漫筆に記してゐる。」と記し、「赤注連や疱瘡神のことし竹、の句に徴し、柏原付近でも殊にさと女の罹病の時にこの法を行ったことが知られる」と述べている。

今、私の手もとに実物の呪い用さんだらぼうしがある。数年前、土地の古老に乞うて作ってもらったものである。それは、十数本の藁で小児の頭が入るくらいの輪を作り、その上を二本の藁でからげ、さらに三カ所から数本の藁を上部に向って円錐上に結んだものである。ここでいう「さんだらぼうし」（さんばいし、ともいう）は本来俵の蓋に使うそれと異ることは明らかである。「笹湯」は、『一茶のおらが春』に、「新小夜嵐に酒湯（ささゆ）とあり、国字痘疹草に『水泔（しろみづ）に酒少（さけすこし）加へ、笹の葉に付てふりかける也』とある」とあり、私も拙稿『校本おらが春』の初刷本で、「笹湯」を「酒湯」と誤っていた（二刷本では訂正）。疱瘡や麻疹にかかった小児の頭に前述のごとき「さんだらぼうし」をかぶせ、その上から熊笹（大葉の笹）で湯をふりかけ、その笹を「さんだらぼうし」に添えて、川へ流すか川辺の木の枝に結びつけておくのだという。私は柏原に隣接する越後中頸城の産だが、少年のころ川辺の木の枝に結びつけたそれを見ている。『七番日記』の「疱瘡のさんだらぼしに蛙哉」、『八番日記』の「くり〳〵と笹湯の笹も小春哉」などは、川辺の木の枝に結ばれた「さんだらぼうし」をよんだものであろう。

注

1 一茶全集（信濃教育会編・信濃毎日新聞社刊）　第六巻　一三五P
2 『校本おらが春』（拙稿・成文堂刊）一P
3 日本俳書大系第一二巻『一茶一代集』下巻　八五P下
4 『評釈一茶のおらが春』（十字屋書店）一一二P
5 『おらが春新解』（明治書院）八九P
6 日本古典全書『小林一茶集』（伊藤正雄校注・朝日新聞社）二七八P
7 一茶全集（信毎版）第六巻一六八P中
8 一茶全集（信毎版）第六巻　一四四P上
9 『校本おらが春』八三P以下に翻刻附載
10 一茶全集（信毎版）第六巻　一七二P上